

水稲現地栽培指導会資料（6月～8月）

令和6年6月

福島県県北農林事務所伊達農業普及所

1 気象経過（アメダス梁川 5/31まで）

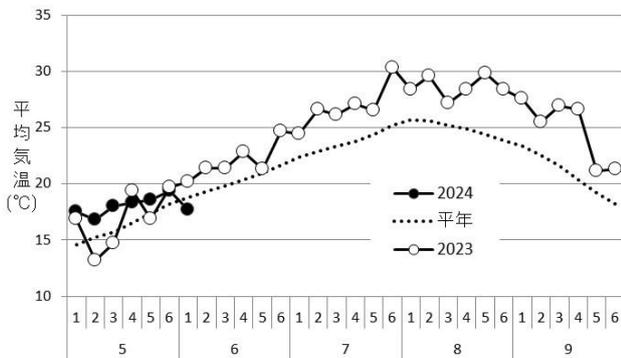


図1 平均気温の推移

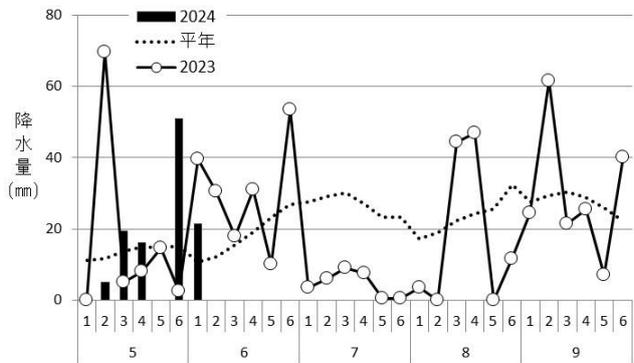


図2 降水量の推移

2 東北地方の天候予報（6～8月 3か月予報、仙台管区气象台 5/21 発表）

- 平均気温は高い確率 50%、降水量は多い確率 40%。
- 東北南部の梅雨入りは、平年 6/12、昨年 6/9 でした。

3 夏季の高温対策

- 令和5年度は、夏季の異常気象(高温)の影響で白未熟粒や胴割、カメムシ害等が発生して米の品質が低下しました。
- 令和6年度の3か月予報は、昨年と同様に高いと予想されています。このため出穂期前後に下記(1、2)の対策を行い、良質米の生産を進めましょう。

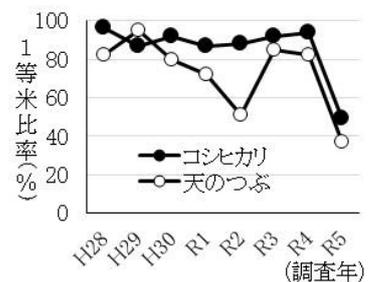


図3 1等米比率(%)

(1) 出穂前の追肥

- ・ 品質低下防止のため通常施肥に加え出穂前に追肥を行うと白未熟粒が減少し整粒歩合が高くなります(図4)。
- ・ このため、天気予報(2週間、1か月等)で出穂期以降が高温と予想され、出穂期の葉色に著しい低下(葉色低下: SPAD値が32以下)が予想される場合は、出穂前に追肥を行い品質の維持に努めて下さい。

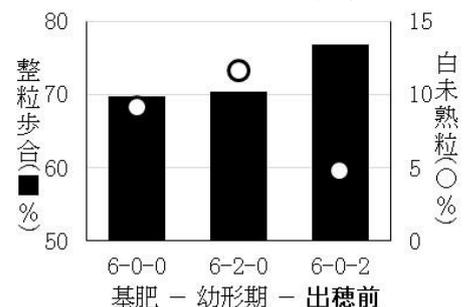


図4 追肥時期と品質

- ① 《基肥+追肥体系》 + 【窒素成分 1kg/10a 程度、※出穂3日前に判断】
- ② 《基肥一発肥料》 + 【窒素成分 1kg/10a 程度、※出穂 10 日前に判断】

(2) 出穂後の飽水管理

- ・ 出穂期頃は浅水による湛水管理として、その後は間断かんがいを基本とする。

- しかし、出穂期以降が高温の場合は、飽水管理を行うと水田の地温を下げて白未熟粒を減らす事ができます（図5）。
- このため、出穂後に令和5年度のように平均気温が26℃以上となる場合は、飽水管理（常に足跡や溝切跡に水が溜まっている状態、ひたひた水）で稲体温度の上昇を抑えて品質の低下を防ぎましょう。
- なお、落水時期は出穂後30日を目安とするが、その後も高温が続く場合は、ほ場の条件等を考慮して収穫7～10日前まで走り水を行いましょう。

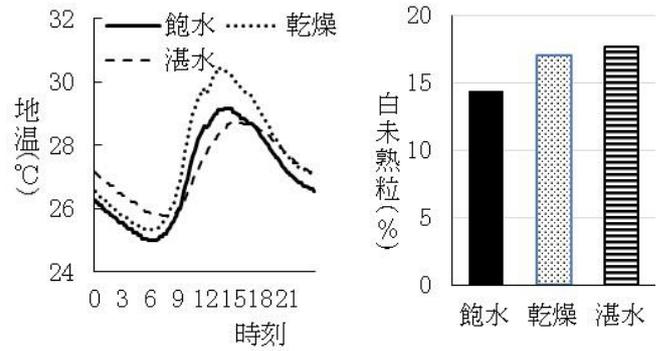


図5 出穂後の水管理による地温と品質

4 水稻の生育状況について

○6/4現在の水稻の生育状況は、平年並（県農業総合センター本部）。

品種	年次	田植え	草丈	茎数	葉数
			(cm)	(本/m ²)	(枚)
コシヒカリ	本年	5/15	27.2	124	5.2
	前年	5/15	23.6	148	5.1
	平年	5/15	25.1	161	5.3
	平年比	0	108	77	-0.1
天のつぶ	本年	5/15	26.6	134	5.2
	前年	5/15	24.7	171	5.1
	平年	5/15	25.5	150	5.2
	平年比	0	104	89	0.0

5 水管理

(1) 中干し（根の健全化・無効分げつ抑制・倒伏防止・地耐力の向上）

○有効茎数（23～25本/株）が確保されたら、速やかに中干しを行いましょう。

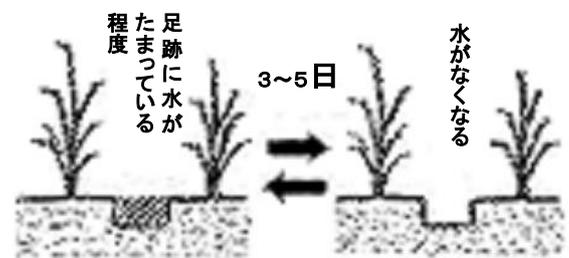
目安： 天のつぶ：6/20頃～7/5頃、コシヒカリ：6/25頃～7/10頃

○田面に1cm程度のひび割れ、または人が歩ける程度の固さ（田面に足跡がつく程度）まで、5～7日間を目安に田面を干します。

○砂質土壌の場合、田面が羊糞状になり、足跡に水がたまる程度の弱めの中干しにします。

○溝切り（排水に有効）は10～20条おきに1本を目安に行い、溝を排水口に確実に連結しましょう。

○中干し終了直後は根腐れ発生防止のため、走り水により急激な湛水状態にしないようにし、終了後の水管理は、間断かん水を基本とします（図5）。



右と左を繰り返すのが間断かん水

図6 間断かん水のやり方

(2) 低温時の深水管理（幼穂の保護）

- 穂首分化期（出穂30日前頃）以降、気温20℃以下が予想される時には、深水管理とします。
- 幼穂形成期（出穂24日前頃）に低温に遭遇すると耐冷性が低下し、減数分裂期頃（出穂12日前頃）の低温で障害不稔が増加するため、深水管理を行い、被害軽減に努めましょう。

水深の目安：幼穂形成期 5 cm、減数分裂期 15～20 cm（幼穂の高さ以上）

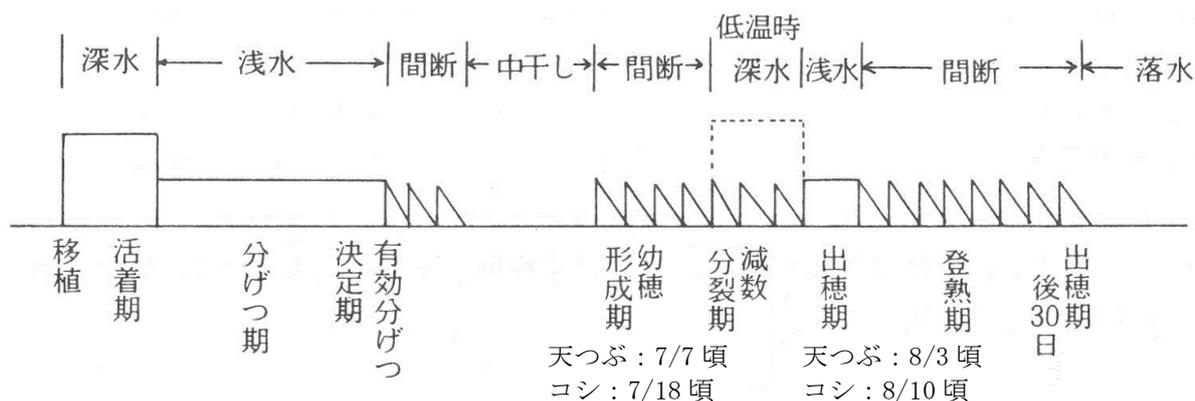


図7 水管理の模式図

6 追肥

(1) カリ追肥（青枯れ症状の発生抑制）

表1 カリ肥料別の使用量と施用時期

資材名	使用量(kg/10a)	施用時期
ケイ酸カリ	15～20	出穂40日前 (天のつぶ：6月中旬 コシヒカリ：7月上旬頃)
塩化カリ	3～4	出穂35日前 (天のつぶ：6月下旬 コシヒカリ：7月上旬頃)

○天のつぶの割刈対策として、基肥でケイ酸カリを散布していない人はこの時期に散布しましょう。

○ケイ酸は、栄養生長期よりも生殖生長期（出穂期以降）の方が施用効果は高いですが、ケイ酸カリは緩効性であるため、この時期に施用します。

※ケイ酸の効果

- ①根張りを良くし、茎葉を丈夫にして病虫害及び、倒伏抵抗性を高めます。
- ②稲体の受光態勢を良くすることで、群落の光環境を改善し、登熟歩合を高めます。

(2) 穂肥（粒張り（登熟）向上）

表2 品種別穂肥の施用時期と窒素分量

品種	施用時期	窒素分量(kg/10a)
ふくひびき 天のつぶ	出穂25～20日前（幼穂長1～2mm）	2.0
コシヒカリ	出穂15日前（幼穂長2～3cm）	1.0～1.5

○側条施肥で葉色が低下した場合、早めにつなぎ肥（窒素量1kg/10a）を施用します。

○穂肥時期に葉色が濃い（草丈が伸びている）場合、穂肥を遅らせて出穂7日前頃に

窒素量で1 kg/10a を施用します。

- コシヒカリは、出穂前15日頃に草丈85cm以上、葉色値（カラスケール）3.5以上であると倒伏する危険性が高まるため、穂肥の施用時期を遅らせ、穂肥の施用量を少なくします。
- 基肥一発肥料（緩効性肥料）を施用して、幼穂形成期頃に葉色が極端に低下する時は、穂肥を施用しましょう（基本的に穂肥は必要ありません）。
- 砂質土壌では穂肥を2回に分けて実施するか、緩効性肥料(有機入り肥料)の施用が効果的です。
- 登熟向上を目的に出穂10～20日前にフジワン粒剤3～4kg/10aを散布しましょう。**

7 雑草対策

○残草状況に応じて中・後期除草剤を散布します。除草剤の使用時期を確認しましょう。

(1) ノビエと広葉雑草（ホタルイ、クログワイ及びオモダカ等）が残草した場合（薬剤例）

除草剤名	使用量 (/10a) (散布液量)	使用時期	使用回数	施用方法
ツイゲキ豆つぶ250※	250g	移植後14日(稲5葉期以降)～ノビエ4葉期 (但し、収穫60日前まで)	1	湛水散布又は無人航空機による散布
レプラス1キロ粒剤	1kg	移植後14日～ノビエ4葉期 (但し、収穫60日前まで)	1	
ハイカット1キロ粒剤※	1kg	移植後15日～ノビエ3.5葉期 (但し、収穫60日前まで)	1	
フォローアップ1キロ粒剤	1kg	移植後15日～ノビエ5葉期(イネ4葉期以降) (但し、収穫60日前まで)	1	湛水散布又は無人ヘリコプターによる散布
クリンチャーバスマE液剤	1,000ml (70～100L)	移植後15日～ノビエ5葉期 (但し、収穫50日前まで)	2	落水散布又はごく浅く湛水して散布
ワイドアタックSC	100ml (100L)	移植後20日(イネ5葉期以降)～ノビエ6葉期 (但し、収穫30日前まで)	2	

※アオミドロ・藻類による表層剥離に薬効

(2) ノビエのみが残草した場合（薬剤例）

除草剤名	使用量 (/10a) (散布液量)	使用時期	使用回数	施用方法
クリンチャー1キロ粒剤	1kg	移植後7日～ノビエ4葉期 (但し、収穫30日前まで)	2	湛水散布又は無人ヘリコプターによる散布
	1.5kg	移植後25日～ノビエ5葉期 (但し、収穫30日前まで)		
トドメMF乳剤	200ml (25～100L)	移植後14日～ノビエ7葉期 (但し、収穫50日前まで)	2	湛水散布又は落水散布
ヒエクリーン1キロ粒剤	1kg	移植後15日～ノビエ4葉期 (但し、収穫45日前まで)	1	湛水散布又は無人ヘリコプターによる散布
クリンチャーEW	100ml (25～100L)	移植後20日～ノビエ6葉期 (但し、収穫30日前まで)	2	湛水散布又は落水散布

(3) 広葉雑草（ホタルイ、クログワイ、オモダカ等）のみが残草した場合（薬剤例）

除草剤名	使用量 (/10a) (散布液量)	使用時期	使用回数	施用方法
バイスコープ 1キロ粒剤	1 kg	移植後14～60日 (但し、収穫45日前まで)	1	湛水散布、ごく 浅く湛水して散 布又は無人航空 機による散布
バサグラン粒 剤（ナトリウ ム塩）	3～4 kg	移植後15～55日 (但し、収穫60日前まで)	1	落水散布又はご く浅く湛水して 散布 ※散布後、最低 3日間は落水ま たはごく浅い湛 水（5日）を保 つ。
バサグラン液 剤（ナトリウ ム塩）	500～700ml (70～100L)	移植後15～55日 (但し、収穫50日前まで)	2	

(4) その他（アオミドロ、藻類、表層剥離、クサネム、イボクサ）のみが残草した場合（薬剤例）

除草剤名	使用量 (/10a) (散布液量)	使用時期	使用回数	施用方法
モゲトン粒剤	2～3 kg	ウキクサ類、藻類の発生始～発生盛期 (但し、収穫45日前まで)	3	湛水散布又は無 人ヘリコプター による散布
	1～2 kg	藻類・表層はく離の発生時 (但し、収穫45日前まで)		
ウィードコア 1キロ粒剤	1 kg	移植後7日～ノビエ4葉期 (但し、収穫60日前まで) ※散布適期クサネム30cm、イボクサ4 0cmまで	2	湛水散布又は無 人航空機による 散布
ノミニー液剤	50～ 100ml (100L)	移植後30日～クサネムの草丈40cmま で (但し、収穫60日前まで)	1	落水散布又はご く浅く湛水して 散布
		移植後30日～イボクサの茎長30cmま で (但し、収穫60日前まで)		

8 病害虫防除

(1) いもち病

- 気温20～25℃、日照不足、葉の濡れが長時間続き、稲体の窒素含有量が多いときに発生しやすくなります。
- **置き苗**は葉いもちの発生源になるので**早急に処分**しましょう。
- 穂いもち対策で散布剤を使用する場合は、穂ばらみ末期と穂揃期の2回を基本に散布、多発生が予想される場合は傾穂期にも追加で散布します。
- **葉いもちの場合(薬剤例)**

農薬名	使用量 (/10a)	使用時期 (防除適期)	使用回数	備考
ビーム粉剤D L	3～4 kg	収穫7日前まで(分けつ期)	3	
ラブサイド粉 剤DL	3～4 kg	収穫7日前まで(分けつ期)	3	
ノンブラス粉 剤DL	3～4 kg	収穫7日前まで(分けつ期)	2	
ブラシン粉剤 DL	3～4 kg	収穫7日前まで(分けつ期)	2	

○ 穂いもちの場合(薬剤例)

農薬名	使用量 (/10a)	使用時期 (防除適期)	使用回数	備考
コラトップ1 キロ粒剤12	1～1.5kg	出穂30日前まで(出穂15～10日前)	2	湛水散布
フジワン粒剤	3～5kg	出穂30～10日前まで 但し収穫30日前まで(出穂30～10日前)	2	湛水散布

(2) 稲こうじ病

- 穂ばらみ期から出穂期にかけて低温、日照不足、多雨の年は、発生が多くなります。また、多肥でも発生が助長されます。

○ 稲こうじ病の場合(薬剤例)

農薬名	使用量 (/10a)	使用時期 (防除適期)	使用回数	備考
モンガリット 1キロ粒剤	1～1.3kg	収穫30日前まで(出穂21～14日前)	2	湛水散布
Zボルドー粉 剤DL	3～4kg	出穂10日前まで(出穂20～10日前)	—	※葉が濡れていると薬害発生の恐れあり

(3) 紋枯病

- 多肥、幼形期以降の高温(平均気温22～23℃以上)・多湿で発生が助長されます。
- 前年度、被害株に形成された菌核が一次感染源になるため、前年度発生が多かったほ場では必ず防除してください。また、過剰な窒素施用は避けましょう。

○ 紋枯病の場合(薬剤例)

農薬名	使用量 (/10a) (散布液量)	使用時期 (防除適期)	使用回数	備考
モンガリット 1キロ粒剤	1～1.3kg	収穫30日前まで(出穂28～14日前)	2	湛水散布
リンバー粒剤	3～4kg	収穫30日前まで(出穂30～10日前)	2	湛水散布
バリダシン液 剤5	1,000倍 (60～150L)	収穫14日前まで(穂ばらみ～穂揃期)	5	
モンカットフ ァイン粉剤 20DL	3～4kg	収穫14日前まで(穂ばらみ～穂揃期)	4	

(4) カメムシ類、イナゴ類

- 水田周辺の草刈りをこまめに実施し、生息場所をつくらないようにします。また、出穂の10日前頃まで地域一斉に草刈りを終了しましょう。
- 出穂の早い雑草(ノビエ、ホタルイ)に集まるため、水田内に残草している場合は、早めに処理しましょう。
- 散布剤の防除は、乳熟期を基本とし、発生状況により7日おきに追加防除をおこない、特に、天のつぶなど割粃が発生しやすい品種では、出穂20日後頃に追加散布をおこないましょう。

○ カメムシ類の場合(薬剤例)

農薬名	使用量 (/10a)	使用時期 (防除適期)	使用回数	備考
スミチオン粉剤3DL	3～4kg	収穫21日前まで(出穂期以降(乳熟期))	2	出穂前は1回
キラップ粉剤DL	3～4kg	収穫14日前まで(出穂期以降(乳熟期))	2	
アルバリン粉剤DL	3kg	収穫7日前まで(出穂期以降(乳熟期))	3	
スタークル粉剤DL	3kg	収穫7日前まで(出穂期以降(乳熟期))	3	
ダントツ粉剤DL	3～4kg	収穫7日前まで(出穂期以降(乳熟期))	3	
キラップ粒剤	3kg	収穫14日前まで(出穂期以降(穂揃期～乳熟期))	2	湛水散布
アルバリン粒剤	3kg	収穫7日前まで(出穂期以降(穂揃期～乳熟期))	3	湛水散布
スタークル粒剤	3kg	収穫7日前まで(出穂期以降(穂揃期～乳熟期))	3	湛水散布
ダントツ粒剤	3～4kg	収穫7日前まで(出穂期以降(穂揃期～乳熟期))	3	湛水散布

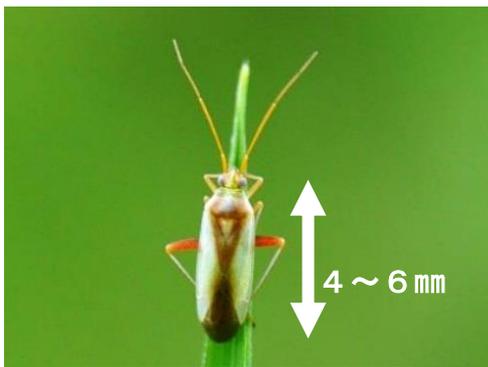


写真1 アカスジカスミカメ

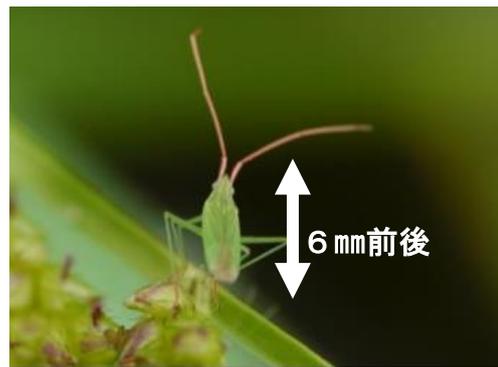


写真2 アカヒゲホソミドリカスミカメ

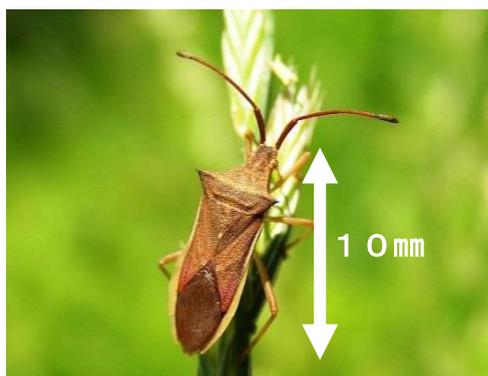


写真3 ホソハリカメムシ



写真4 クモヘリカメムシ

○ イナゴ類の場合(薬剤例)

農薬名	使用量 (/10a)	使用時期 (防除適期)	使用回数	備考
アルバリン粉剤DL	3kg	収穫7日前まで(6月中～7月上旬)	3	

スタークル粉 剤DL	3 kg	収穫7日前まで(6月中～7月上旬)	3	
トレボン粒剤	2～3 kg	収穫21日前まで(6月中～7月上旬)	3	湛水散布

- ★ 令和6年5月29日現在の農薬登録内容に基づき作成しています。
- ★ 農薬は使用前に必ず農薬のラベルを見て農薬の使用基準を確認しましょう！
- ★ 農薬の散布後7日以上は止水管理として落水等を行わないようにしましょう！
- ★ 周囲にミツバチの巣箱が設置されている場合、養蜂業者に連絡しましょう！
- ★ 防除を行った際には、忘れずに防除日誌へ記帳をしましょう！
- ★ 無理のない作業、余裕を持った慎重作業で、農作業事故を防止しましょう！
- ★ これから暑い日が増えます。こまめな水分補給と休憩で熱中症を予防しましょう！